



TITLE:

附属図書館のあり方

AUTHOR(S):

CITATION:

附属図書館のあり方. 静脩 1966, 3(5): 4-4

ISSUE DATE:

1966-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36366>

RIGHT:

附属図書館のあり方

○

前田 昇 三

おとなりの台所の様子を、比較的良好に理解しているものが、編集者の依頼とはいえ、「要望」といって次の事々をお願いするのはよくよくのことである。ぜひ手じかなものから実現のために積極的な努力をしていただきたいものである。

その一つは、部局図書室で受入事務を終えた図書資料は附属図書館に持ち込まれ、附属図書館としての整理業務が行なわれているが、その整理に要する日数は、数旬を必要とするらしいが、学術情報の迅速化が叫ばれている昨今、図書整理期間の短縮化を願い、本館としての機能を十二分に果たして、利用者に迅速、適確な情報を伝達する業務を拡大されることを要望します。

つぎに、研究者がときたま必要とする辞書、辞典等のすべてを所属機関で整備することは種々の困難をとまらう。このような参考図書を附属図書館で、できうる限り多様に収集することを、附属図書館業務の一つの柱とされることを望みます。なお、所蔵参考図書の目録の編集・出版をはかり、既存の参考図書が十二分に利用できうるようにしていただければとても便利と考えます。

もう一つのお願いは、附属図書館で月々到着する図書資料、また新しく受入された雑誌についてのインフォメーションを考えていただきたい。できれば“静脩”の一部として新着図書・資料、雑誌欄を編集して、案内するのも一案かと思えます。

このような「要望」をかなえていただくには、人手不足とか予算僅少等がネックになることと考えますが、「要望」の一つ一つは附属図書館での大切な仕事ではないかと思われますのでこれらがぜひとも実現されることを期待します。

(経済研助手)

○

沢 居 紀 充

次のような意味でネット・ワークの中心としての仕事を進めてほしい。

I. <図書館学の研究組織の中心として>

図書館学研究室を設置し、

- ①部局図書室間の整理・奉仕にわたる技術を交流し開発する。
- ②技術的な提案、学問的な研究、それらを実際に生かすシステムを作るための運動の拠点となる研究誌の発行。
- ③図書館学資料の core collection を充実させる。
- ④図書館員自身が、図書館員自身のためにインフォメーション・サービスを実験し、得られた成果を各部局で応用する。

II. <文献の相互利用の中心として>

- ①全学の蔵書構成を明らかにする。
- ②ユニオン・カタログ(カード)室に専任の職員を置き利用案内を充実する。
- ③冊子目録の刊行、受入目録の収集、刊行。

III. <情報奉仕の中心として>

- ①一般参考図書を系統立てて収集する。
- ②各部局図書室で subject bibliography を調製するための援助を行なう。

具体的な要望はたくさんあるが、今最も必要なことは、学内の図書館員相互のパイプの通じをよくして、仕事や蔵書や情報に至る道筋を常に風通しのよいものに保つ上で本館がリーダーシップをとって、諸提案が速かに実現されるように各方面へ働きかける組織の中心となることである。この点から、図書館学研究室の設置を特に望みたい。これが無理なら各部局で予算を分担し、図書館学の core journal を収集し、記事索引を作成することなどを通じて、研究室の設置にまで至る活動を組織することからでも始めていただきたい。

(経済学部図書室)

○

A. K.

附属図書館の部局図書の登録、整理事務に追われている現状を見て、登録のあり方と併せて中央集権化を急ぐ附属図書館のあり方を考え直して見たい。附属図書館の受入掛から週1回ぐらい各部局へ登録に必要なものを持って出張するとか、時間と手間を出来るだけはぶくよう考えてほしい。現在附属図書館が果している役目、登録と全学の図書カード検索が出来るということに重点を置き、事務範囲を縮少してはどうか。つまり、図書